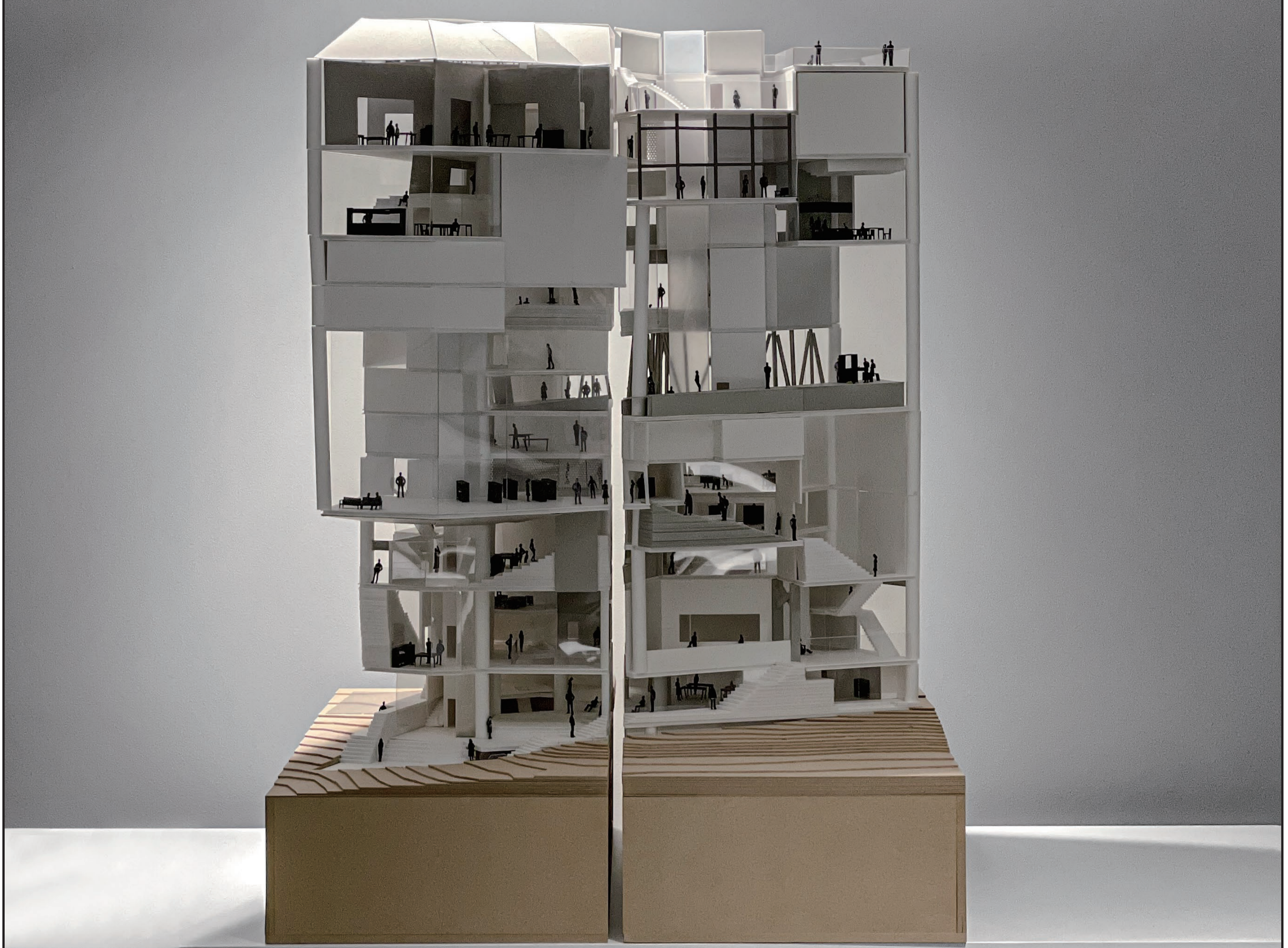
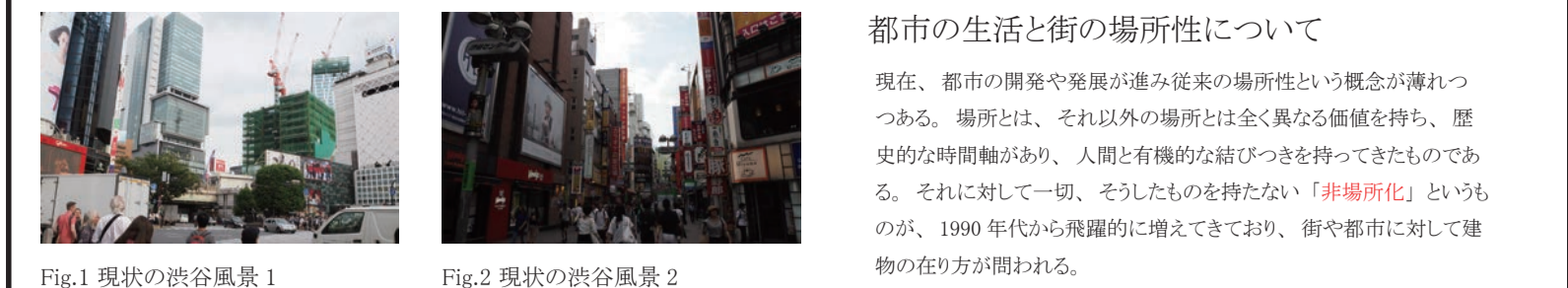


交差する都市の原風景 ～モルフェームを用いたこれからの渋谷商業空間の再構築～

昨今の世の中では「非場所化」が進んでいく。我々の住む世界の中でどうリアリティを取り戻していくのか。場所という概念は、それ以外の場所とは全く異なる価値を持ち、歴史的な時間軸があり、人間と有機的な結びつきを持ってきたものである。この計画では衰退していく渋谷商業の空間を現代的に解いていく。

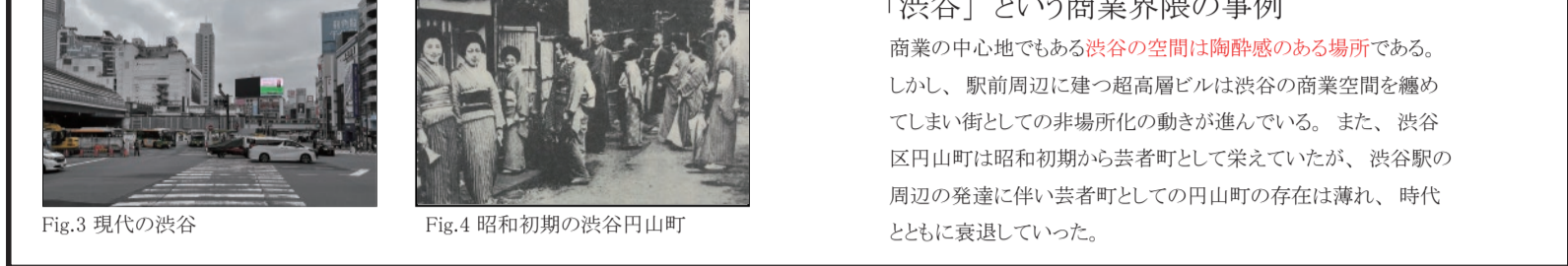


0 | 現状の都市



都市の生活と街の場所性について
現在、都市の開発や発展が進み従来の場所性という概念が薄れつつある。場所とは、それ以外の場所とは全く異なる価値を持ち、歴史的な時間軸があり、人間と有機的な結びつきを持ってきたものである。それに対して一切、そうしたものを持たない「非場所化」というものが、1990年代から飛躍的に増えてきており、街や都市に対して建物の在り方が問われる。

1 | 衰退していく三業地



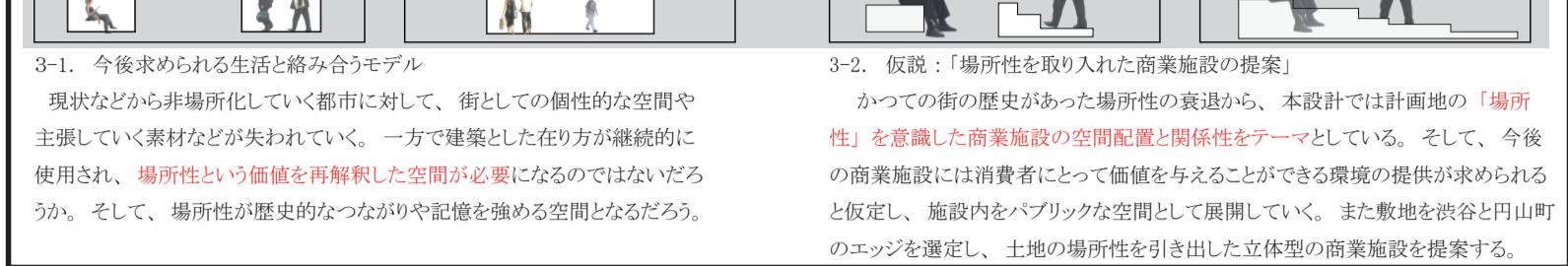
「渋谷」という商業界隈の事例
商業の中心地でもある渋谷の空間は陶酔感のある場所である。しかし、駅前周辺に建ち超層ビルは渋谷の商業空間を締めつけてしまい街としての非場所化が進んでいる。また、渋谷区円山町は昭和初期から芸術者町として栄えていたが、渋谷駅の周辺の発達に伴い芸術者町としての円山町の存在は薄れ、時代とともに衰退していった。

2 | 新しい関係性



「場所性」を交えて関係性を作り直す
今後の都市の商業施設においては、生活と仕事等の両立により場所的や時間的制約を抱える人たちが活躍できるような仕組みを必要とされている。そのため街の個性として生きる「場所性」を交えることで場所の愛着が生まれるだろう。

3 | 仮説

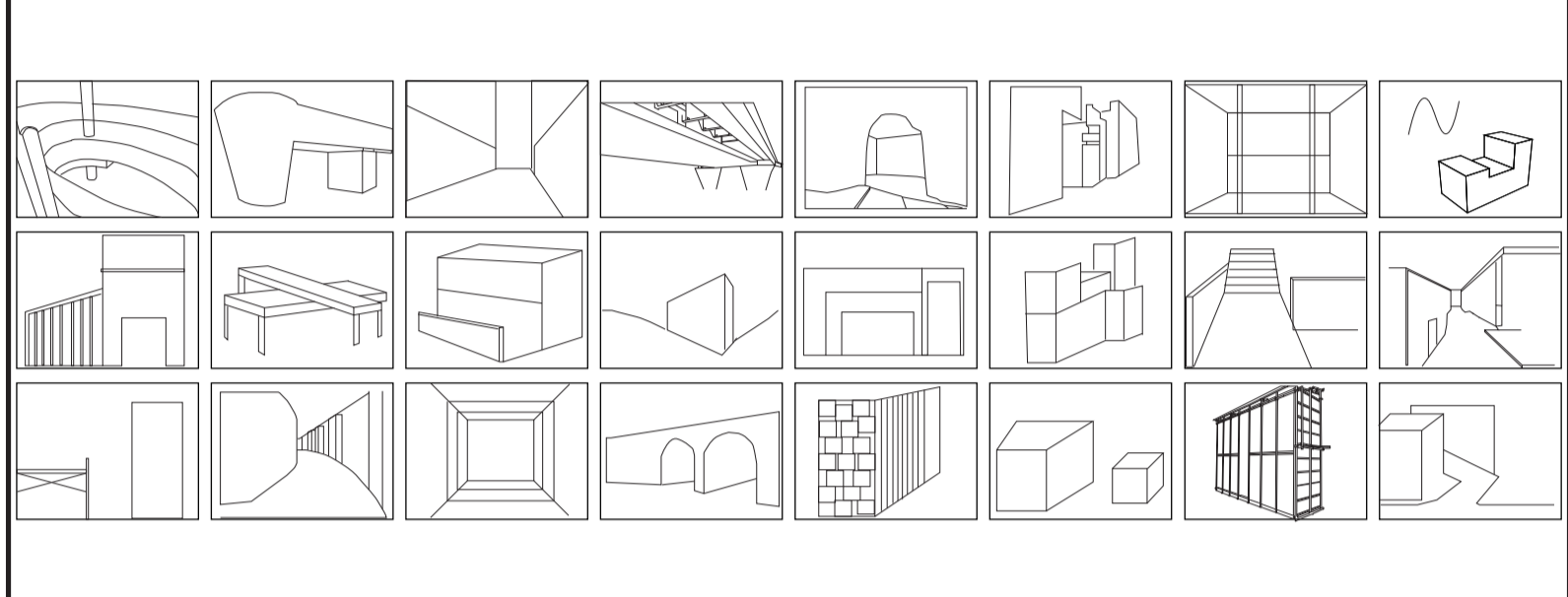


3-1. 今後求められる生活と働き合うモデル
現状などから非場所化していく都市に対して、街としての個性的な空間や主張していく素材などが失われていく。一方で建築した方が継続的に使用され、場所性という価値を再解釈した空間が必要になるのではないだろうか。そして、場所性が歴史的なつながりや記憶を強める空間となるだろう。

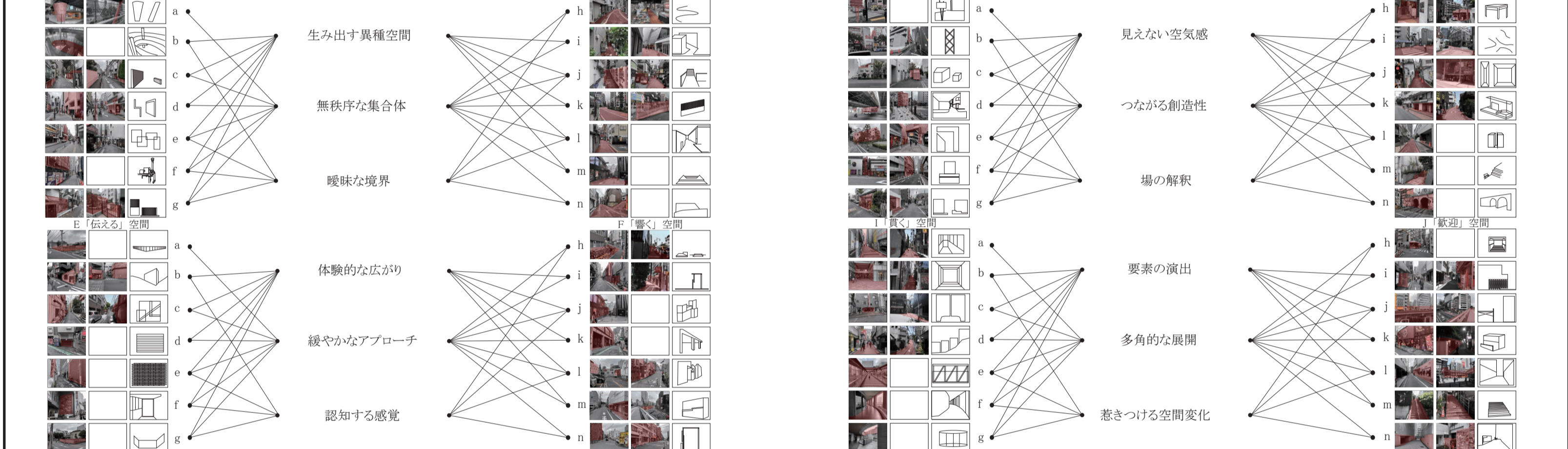
4-1 | 渋谷円山町研究 ～街を形成する形の分析～



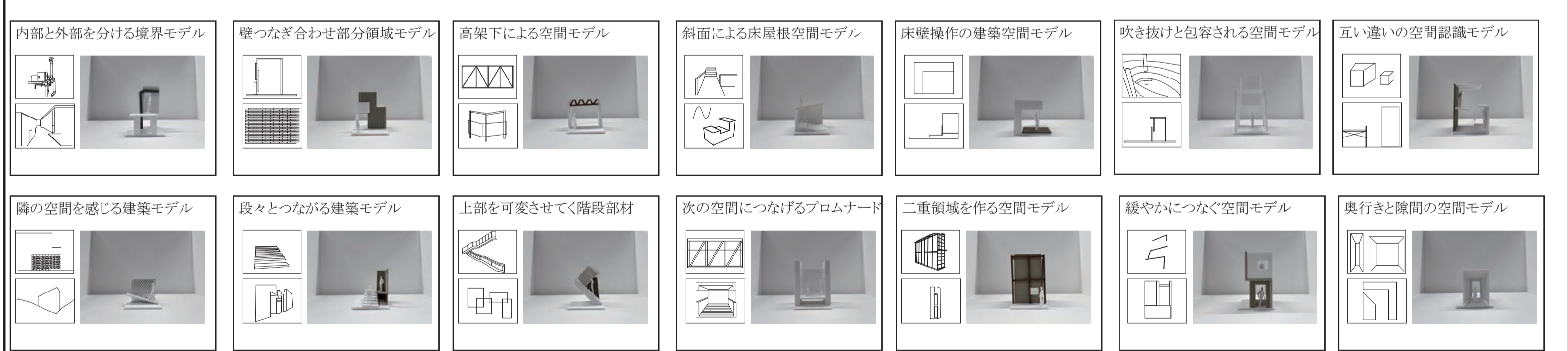
4-2 | 渋谷円山町研究 ～街に残る場所 (形態素) の記録～



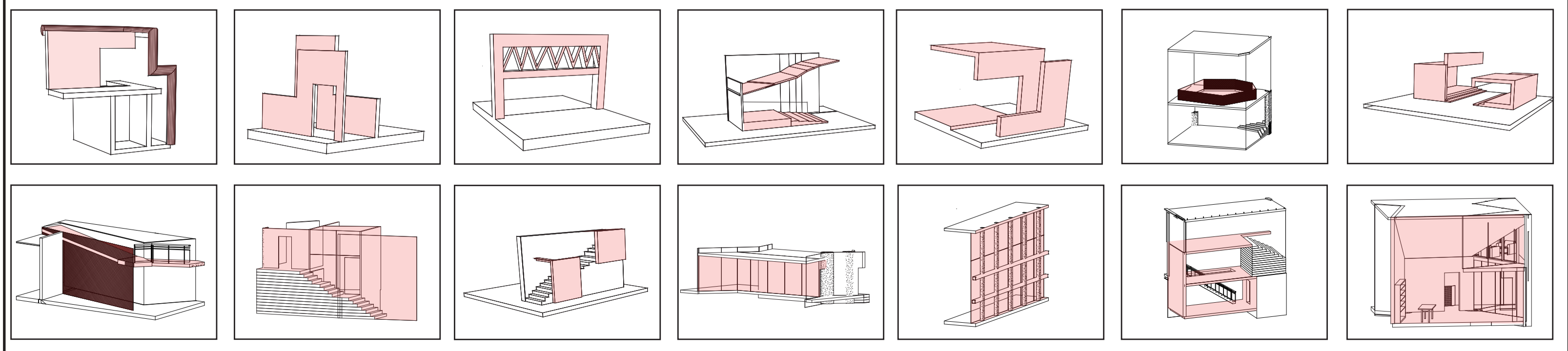
5-1 | 手法 I ～空間要素 (モルフェーム) の分類～



5-2 | 手法 I ～空間の名称～



5-3 | 手法 I ～形の転用～



6 | イメージパース



7 | 全体アイソメ図

